

< 巻頭言 >

## 『茗溪社会教育研究』発行にあたって

筑波大学人間系教授 手打 明敏

本誌は本号より名称を『茗溪社会教育研究』に変更することになった。変更するに至った理由と新たな発行目的について記しておきたい。

本誌は2010（平成22）年3月に『筑波大学「地域と教育」研究会報』として創刊された。研究会報は会員の研究報告と研究会の活動記録、研究会メンバーの交流を目的として創刊された。なお、研究会報創刊の経緯については創刊号巻頭言に記しておいたので参照していただきたい。

昨年（2012年）、研究会報第3号の発行後、本誌を研究室の教員と大学院生および修了生、卒業生の研究成果発表を目的とする『研究室報』として刊行する時期に来たのではないかということが研究室で話し合われた。本研究室にとって『研究室報』を刊行することは課題であった。学術研究誌としての性格をもった『研究室報』を刊行するには研究室にそれ相応の力量がなければならないからである。2010年12月より専任教員の2人体制が整い、また研究室出身者が大学教員として活躍するようになってきたことから『研究室報』刊行の時期が到来したと判断した。本誌は、教員と大学院生そして出身者の研究成果発表の場であるとともに、研究室の研究・教育活動を記録し発信する「生涯学習・社会教育学研究室」の年報として刊行されることになった。「地域と教育」研究会の会報という性格からの脱皮を図るため、編集委員体制を強化し投稿論文については査読制を取り入れている。もちろん、「地域と教育」研究会の活動報告も研究室の活動として収録されることになる。

本誌を『茗溪社会教育研究』と命名したのは、東京教育大学以来、今日まで本研究室関係者が集っている「茗溪社会教育研究会」に由来する。「茗溪社会教育研究会」は伝えられる記録によれば、1960（昭和35）年12月の卒業生の忘年会において名称が定められ会則が作成された。その時定められた会則は①親睦をはかる、②研究をすすめる、③連絡機関としての性格をもたせる、という内容であった。

数年前に、東京教育大学の卒業生から茗溪社会教育研究会会報「アンテナ」創刊号（全19頁）を寄贈していただいた。1961年6月1日に発行されている。東京教育大学の社会教育研究室の出身者は、この当時すでに50人ほどになっていた。第1期生の古野有隣先生が、「序にかえて「アンテナ」の名付け親から」と題した序文を書いておられる。そのなかに次のような一節がある。

「みんなそれぞれいろいろな方面で立派な仕事をしているのが伝わらないのは自他ともに残念なことです。とくにこれから卒論を書こうとする人が資料を集める際などにいろいろと先輩諸兄にお力添えをいただけるようになれば、われわれの研究室の出身者の結びつきも一段と価値の高いものとなるでしょう。」

昔の仲間、先輩、後輩との間の交流を促す役目を果たすのが「アンテナ」であると、古野先生は記している。

「アンテナ」が「茗溪社会教育研究会」の会則①と③の性格を強くもったものであるとするならば、『茗溪社会教育研究』は、筑波大学生涯学習・社会教育学研究室の『研究室報』として発行されますが、「茗溪社会教育研究会」の会則②を今日的に継承したものと受けとめていただきたい。もちろん、研究室の卒業生、修了生の交流の「場」としての機能も果たしていきたいと考えています。

本誌を手にされる皆様の積極的な投稿、情報提供をお待ちしています。

(2013年4月10日 記)